**『台湾日日新報』における横光利一関連文章の特徴**

**・文藻外語大学副教授**

katieshie123@gmail.com

日台比較文学、日本語文学専攻

**発表要旨**

2006年『台湾日日新報』（以下は『台日』と略す）のデーターベースのお蔭で、筆者の横光利一研究へは飛躍的な展開をもたらしてくれた。本発表は、それによる三つの成果を紹介しながら、そこから新たな課題を提起し、論じたい。

まず、一つ目は、『定本横光利一全集』未収録随筆「台湾の記憶」（『台日』1938年5月1日）の発見である。

横光利一と戦前台湾との関連を調査していた際に、『台日』のデーターベースを利用し、あるいは図らずも日本本土の日本文学研究では、未発見となっていた「台湾の記憶」を見出し、それを「『定本横光利一全集』未収録随筆「台湾の記憶」その他―『台湾日日新報』における横光利一」（『横光利一研究』第11号、2013．3）にまとめることができた。

二つ目は、この「台湾の記憶」によって、「天使」（初出『京城日報』1935年2月28日～7月6日、同年3月1日より『台湾日日新報』と『名古屋新聞』にも掲載） など、新聞小説が「分割発表」されていたことが分り、それが、小説の展開の仕方に影響を与えたものと考えられる。

三つ目は、『台日』における横光関連文章の整理を通して、全集収録や「内地」メディア掲載文との異同を研究することができた点である。たとえば、横光の「文学の科学性其他」（『台日』1932.6.24）は、「新しい心理小説」と「純粋文学」に言及した資料として重要な「心理主義文学と科学」（『文学時代』1931年6月）の内容に加筆し再構成したものである。これが1930年代純文学のあり方に一石を投じた横光の「純粋小説論」（『改造』1935年4月）発表以前、すなわち「純粋小説論」の発表と「天使」の連載に先立って『台日』に掲載された点は大いに注目される。

　小稿は、上記の成果を踏まえて、次の3点について更なる分析をしたい。

1.**『台湾日日新報』における在台日本人評論家**

一つ目の成果をまとめた論文には、以下のように、『台日』に掲載された横光利一関係文章がある。

①衣笠貞之助「「新感覺派映画聯盟」の決起声明」（一九二六年七月一日日刊六面）

②編集部「「狂った一頁」の上演」（一九二六年一○月六日日刊六面）

③紺野淑藻郎「文学の展開性と新感覚派文学」（一九二八年一月一三日日刊六面）

④橫光利一「女・女・女」（一九三○年一○月二二日夕刊第三面）

⑤横光利一「文学の科学性其他」（一九三二年六月二四日日刊六面）

⑥唐木順三「文藝時評（一）江間道助氏の『橫光利一論』―理路整然たる名評」 （一九三四年七月一○日日刊六面）

⑦北川原幸朋「一九三四年の文壇を回顧する―『紋章』その他」（一九三四年一二月一四日日刊第六面）

⑧編集部「本紙朝刊を飾る／次の小説豫吿／「天使」／橫光利一氏作／宮田重雄氏畫」（一九三五年二月二一日日刊第七面）

⑨横光利一「作者の言葉」（同右）

⑩菊池寛「菊池寛談」（同右）

⑪横光利一「天使」（一）～（一二八）（一九三五年三月一日～七月七日、日刊第四か六面）

⑫詩村映二「橫光利一氏の「天使」を讀む」（一九三五年一一月一六日日刊第七面）

⑬編集部「文壇早耳／橫光利一氏のカンフル注射」（一九三五年三月一二日日刊第七面）

⑭江口渙「純粋小説と通俗小説（上）」（一九三五年五月三一日、日刊第四面）

⑮江口渙「純粋小説と通俗小説（下）」（一九三五年六月五日、日刊第六面）

⑯横光利一「最近の感想」（一九三六年一二月一一日日刊第四面）

⑰横光利一「台湾の記憶」（一九三八年五月一日日刊第九面）

⑱広告「橫光利一氏〈覚書〉刊行」（一九三五年六月一九日日刊第一○面）

⑲広告「寢園（橫光利一著）」（一九三九年六月二四日日刊第四面）

⑳横光利一「月夜（橫光利一著作）」（一九三九年九月一二日日刊第六面）

編集部「台湾の文学運動は　まだ団結が足らぬ　文学者大会　台湾四代表交交語る」（一九四三年八月二七日夕刊第二面）

　以上の関連文章の特徴として何点か挙げられる。まず、横路啓子氏[[1]](#footnote-1)が「『台湾日日新報』「文芸」欄(一九二六-三五)の役目―プロレタリア文学をめぐって」で指摘した通り、1930年以降の文芸欄は「評論の時代」だが、在台日本人によるものが少なく、日本本土の作家からの転載が多い。たとえば、衣笠貞之助、菊池寛、唐木順三、北川原幸朋がそれに当たる。ところが、紺谷淑藻郎や詩村映二は、どうも台湾在住、または『台日』関連の人物だと推測できる。

紺谷淑藻郎については、星名宏修「「海外進出」とは何だったのか--紺谷淑藻郎「海口印象記」を読む」（陳建忠主編『跨国的殖民記憶与冷戦経験--台湾文学的比較文学研究』、2011）によれば、「海口印象記」という作品は彼が戦時下の台湾文芸誌『台湾文学』（1巻2号、1941.9）に発表したもので、在台日本人作家の一人である。『台日』のDBにかけてみると、5つの評論がある。

また、詩村映二は、『台日』のDBにかけてみると、9つの評論があり、

また、戦後1958年出版した『詩村映二遺稿集』がある。戦前台湾唯一のモダニズム詩結社の中心メンバー楊熾昌(水蔭萍)によると、同じ名前の人物は、神戸（播磨）の詩人で、同じく内地の『詩学』9号（ボン書店、昭和11年2月）に詩が掲載されたこともある。同一人物かどうかの確認は、今後の課題としたい。

**2.横光**「**文学の科学性其他」と初出の異同**

　また、二つ目の特徴として、上記の⑪の小説「天使」の連載以外、横光による文章は4つあり、⑰書き下ろしの「台湾の記憶」のほかは転載ではあるが、④⑯は句読点、改行や省略のみ異同がある。唯一加筆や書き換えがされたのは、⑤「文学の科学性其他」である。

では、いったいその異同は、どういった意味を持つか。

この⑤「文学の科学性其他」は、「心理主義文学と科学」（『文学時代』一九三一年六月）の内容に加筆し再構成したものである。全集所収のものとの異同を明らかにするため、書き足した部分のみ下線を引き、以下のように翻刻しておく。

　　　今日はさまざまの文学が対立してゐることは曾てなかつた状態である。或は新浪漫主義文学或は新心理主義文学とかいつたやうなものが流行してゐる。一方にプロレタリア文学と既成芸術との対立があつて、ここに純粋文学のことが云々されてゐる。この文学の純粋性について考へて見る。作中展開される運命が適確な認識のもとに、当然さうならなければならない組立てをもつてがつちりと必然性のままに進行する。その真実性のある文学をアンドレ・ジイドは純粋文学と云つた、純粋文学と云ふ言葉の出初めたのはそのときからだから、純文学と純粋文学とは違ふわけである。（後略）

　この転載を分析すると、初出の「心理主義文学と科学」の中にある「純粋

文学」という最後の項目をその冒頭に移され、さらに原文にはない下線部の文章を書き足した。日本文学史において、一般的には横光の「機械」など新心理主義時代の作品を、1935年「純粋小説論」をベースにした作品とは区別して論じる。ところが、よく『台日』に転載された時の書き足しに注目すると、「文学の科学性其他」では、すでに「純粋文学」の構想が併記されている。

転載は初出の一年後の1932年6月24日というのは、「天使」（1935.3.1～1935.7.7）とその理論基礎となる「純粋小説論」（1935.4）の発表により発表時期が近い。このことを受けて、初出に加筆してから転載された事の意味を推知できよう。

**3.台湾「純粋小説論」論争の余波**

冒頭に紹介した三つ目の成果においては、『台日』に「天使」の連載途中、日本文壇に一石を投じた横光の「純粋小説論」を発表することが確認できた。それに関連して、直接『台日』を利用した研究成果ではないが、筆者は「日本統治期における台湾の「純粋小説論」論争──横光利一の理論の楊逵による引用（原文中国語）」（林金龍、黎活仁、楊宗翰主編『閱讀楊逵』2013）で、別の新聞『台湾新聞』紙上の「純粋小説論」論争が引き起こされていたことを発見した。

　注目すべきなのは、この論争の中心人物の楊逵は、台湾のプロレタリア文学の大御所で、おそらく植民地日本語文学の「後進」性により、同時期に文芸大衆化と大衆文学との競合を考える際に、内地作家横光の文芸論と「天使」による実践を吸収しつつ、プロ文学におけるリアリズム革新に啓発を受けていた。

言い換えれば、台湾では、芸術派（モダニズム作家）と見なされる横光は、プロ文学者の楊逵による受容も考えられる。

『台日』における横光利一関連文章のもう一つの特徴として、あるいは、研究を展開する方向としては、プロ文学との関連で論じられているところは研究に値する。例えば、前掲した横路論文にある「第三表1926年〜1935年『台湾日日新報』「文芸」欄のプロレタリア文学関連の文章」と引き合わせてみれば、③紺野淑藻郎「文学の展開性と新感覚派文学」（横路48頁）、⑭⑮江口渙「純粋小説と通俗小説（上）（下）」（横路、54頁）は重複している。今後、もし交差的に検証することが新たな発見につながると思う。

また、日本統治期の『台南新報』も最近データーベース化され、さらに旧台湾総督府図書館の台湾図書館が館内所蔵の当時の図書・雑誌を横断全文検索システムなども続々と構築されている。複数のデーターベースを駆使して、『台日』だけで解明できない、紺野淑藻郎や詩村映二の詳細、または台湾の「純粋小説論争」論争の余波を解明するのも可能であろう。

1. 横路啓子「『台湾日日新報』「文芸」欄(一九二六-三五)の役目―プロレタリア文学をめぐって」（『天理台湾学報』一九号、天理台湾学会）、二〇一〇年九月、41頁。 [↑](#footnote-ref-1)